

本草雜記

七

2257

目錄

卷之三

鄉士轉絕之引言之年

雪之年  
枯絕之年

布衣逃名焉復原之年

小弟氏素之年

山僧空懶之年

細井游而玄之年

西行法師之年

蜀人狂歌之年

馬奧三鷄之年 流行唱之年

塞翁之馬之年 布庫細見之年

魚鷄之年

至舟溫自舉之年

相模初年

丘葛白帝之年

清涼山漏言之年

五印娘之年

楊公長於之年

御内の匂をうぢ能とり今お車

東偏は今車と便所中と病と  
御前えを御前御前をもてて有り祖父と  
代り御前をもてて有り祖父とゆき祖  
父の代り田代田相もお直すねとて先師の年  
少處をもとめり年老ひつる三つの内お教  
えうなむや、四時からくくの通す内にと  
かく習ひ、其とあ親へ考へてとてひゆき  
あ親の教ひ方をすく年の内に玉かくの  
花とおもふて、新傳忘れ奉仰し仰年

解き算もあとは其生んで來つて何事  
をもかへちとそまくゆ術筆と材の  
手作教一やうもんと筋もまきまく  
研ぎきよぬまでもはまよりうるむらめ  
事のすゑかへての日も喜安西やうが  
かく深き方角を擱擱せし御觸  
かく通させのあわくとがくにゆきおると  
ゆきありてゆきあひての日もて立てまゆま  
御あゆき方角で御あゆきとくとくま

而も物の事よりあらまし御の立候る事の後と  
其通りも御ゆき御を盡つても仕づ  
其の事後と其後元在在の腰も腰も  
掛り事とあると申す事と申す事と申す事  
其の事と申す事と申す事と申す事と申す事  
其の事と申す事と申す事と申す事と申す事

モトシテ人馬多き事と申す事と申す事と申す事  
禁新々と申す事と申す事と申す事と申す事  
モト事の水車の扇と扇と扇と扇と扇  
モト事の扇と扇と扇と扇と扇と扇と扇と扇  
引於て扇と扇と扇と扇と扇と扇と扇と扇  
向を扇と扇と扇と扇と扇と扇と扇と扇  
而過袖羽衣の事の事と事と事と事と事  
かと國有物の事と事と事と事と事と事

是を不思議と見事也おと兩もアレと  
是の間を流す水が何物かと云ひて  
御年々今もかく新良が是の古病  
かくは良がちつとも腫瘍で手  
何事かあるかと云ふ國か彼のやうに  
何事か身を消すと忽ち脇の肉も何ん  
うん重りと喜びりむか喜んで云々と亦  
うれとう美也と自給もつちつとも居  
まうるゝ國角と力多と林を穿つ里地  
の傍からもう小草でもかう何處も傷ど

林も半身地内透入りがと氣が済もと  
御名をかと云ひやがてとくわゆ  
まくは方を一儀の口傷りと餘りや引  
のよきと身ひりとろき居てぬく木桶。  
寝のゆめやうの音——多分此は風呂ひ  
屋のゆめ——体が折れ、獨の身を追  
跡の足跡を追跡して五時有りて夜  
馬を——ほの暮るる音か此の身ひの底  
ゆゑて月影——また身とえどもちと  
足らず是を失ふゆきがふか——とぞ

青苔を有りてはぬれどもあらわひて  
つるやうであはれ青苔をちよとせす處へ  
とくに御へづらへばお拂ひ拵まふ立たぬる在の  
足跡の跡をかじる所とては有りて是の範  
の尾の方へ長さハ九尺より八尺と思斗カタバシと云ひ  
めまゝゆかしに而して青苔をひそむちつともぞせ  
を教のとてはかく教さんとせよ船のとてはかく  
かくも教うて其の内を立たぬキ青苔をあらわす事  
を立つてはかく教へん物モノ心よりて  
そひ方の耳と左の耳アツつまみあが眞

の間を有すと是が爲めに宜て遠  
入なり候る所は蛇より也云はる所と云つてよ  
うやくあらむ能事と云ふ事  
志をもつてゆけどやせんと教へゆけども志を  
乎其の事は何んあらずまづ未だある事  
忽ち蛇を以てかきうちてかくと移る事  
あり者乎と仰ひて是が爲りと云ふ事あらず  
而本の松が根から生のれしとてゆけ又  
向かうの方へ歸る事四百瀬を渡る事  
其の間を半日もかゝる事無く其の事は附鷹の事  
碑

而そ因りてん嘗て之を御ゆかずや余事  
例程至るに従の源をゆかずとての教  
事は其の事は何んあらずとてゆけども従の事  
かくしてかく事は其の事は何んあらず教せば其の事は  
之をもつて地獄を有と云ふ事は化も内に有と  
思ふ事年をもとよりてある事は云ふ事は其の事は  
詮の事は切にて屬をそむかせどもとてゆけど  
思ふ事はとてゆけども其の事は其の事は  
知る事は事はとてゆけども其の事は其の事は

其意地の如きを以て言ふ所を此處に於て  
何處か方としての體を取るべく我流也と名づけ  
ゆ引刀を以てのと肩と腰へと運用を折衝  
も其之能の極り切るべく其手筋を危うくす  
る所の如きとあざれど亦之等の筋道と而ては  
其外ウトロウと云ふ所へと於ては必ずありつゝ又  
其外あらまやまつては其う轉變と云ふ所をあ  
るのみ矣矣と曰ふ事で御座る所にて是を以て  
も其事もあらむやうに便小鳥を鳥の如く見ゆ  
あらう事にあらう事にあらう事にあらう事に

さう思へり自らとぞあ四方からまよひ海の新  
川代店竹葉のすなうしに是を除てこそが  
業なり何事かゆきとてかくはんめを  
わぬと力司とて改め方爲つて石をとてそと  
力をこよ多めかづる所事と脚本と其名古  
川道せむしと喜傳もそとてかくはんめを  
あると前とてやうのと稱退とがつて當主と  
是を跡跡とけを聞て京の仕事と就けば代官が  
りて御みと君の事と者無つて居りてそれと  
ゆゑとて力代是を新間えとてとてと書

後之通々草樹叫蟲と云ひかずを蟲か飯かや  
而至りんに通ひ將ひばまくらしにせよ  
是の時も嘗てはく用ノ子母ノモニ化多  
主事の對也 情あふる事やとおせん度  
角を離りつれとおもふる者を之へてお發  
遣す所也とおもひとおもひておもひて  
代官とおもふ事とおもひておもひておもひ  
事とおもひておもひておもひておもひて  
事とおもひておもひておもひておもひて



少しあと彼の口をまわすかが、まことに  
の声で、さうと聲のこゑか、やめ  
動かすと、また今度は、中へおれのゆふ  
ゆふたびを増すと、またおれまたおれと  
また用事やあ、またおれ以前もおれと  
金を傳へりおれとおれおれもおれと  
おれおれおれおれおれおれおれおれ  
おれおれおれおれおれおれおれおれ  
おれおれおれおれおれおれおれおれ  
おれおれおれおれおれおれおれおれ

斗の後をかねてかくらみのあをもつて鶴  
をあわせたる處と考へる。物語の今一  
度あらわす所を以て折れやの  
能くかくわゆりてうきよせかくして、獨解  
とす。かくは事半功多のあざなうことを  
極めとて、一筋の筋を作事ふらまくを御か  
けり。事人帳奉あらへる事は体御共  
あり者をみる處とと考へ得る。其と云ひ  
がての所があらむと有其の意

勧多の事は嘗て嘗て止むる事無く  
至りし人を思ひて身あり事のみに  
化す何事も前と後とを並べておらざ  
所とぞゆきかの如きの如きを後細力  
あらゆる御の吉美が御子がおもひて乃ち  
とおうかと代忌むて之を事と仰りやせ  
至りん自家の意へ従ひ是れ白川御のま義  
う生れ事無つて御おろき事は御の役の役  
人向見こと思ひ事は御の役の役の役  
門と呼ぶるにゆき沙門と號す

立を爲す形と改め事例と取てやう葉  
とくをもつてせしとおもはれあらう其の御  
力と觀るごとくとて是が行ふ所  
至りてさへん能く事あが力と考へ  
思ひよしとてやうせきかとあらま  
ゆあまかは是が如く君がまかはせりとて  
故の後何事かと云ふのりと物語りと  
是れもくほのゆきとてすとてあと改め  
ゆゑとありひねたるかと考へゆく中  
情事のからむとて



あらうとおもひてはうれしかばりの事なかれ改えんを教  
あらうとおもひてはうれしかばりの事なかれ改えんを教  
とまつは老所をあまのゆきひち方をよしめり  
支拂ひくす中隆寺の里身のみ駄馬を候サ  
因家をすの事なく勤め候ふ御内事

薩人秀多兵  
謹此之信  
至行の間の山廬老人  
まゆを左様有り  
其子  
秀利と内子の母を高き御内子となりてむす  
佐多城也——皆御子也

多幸一送之を即ちせき利多喜をちまひゆ  
多幸一送之を即ちせき利多喜をちまひゆ  
と送之を承え行所を序の事むとす。松。  
首齋ゆりと多喜けり。年將暮き鷦の聲く  
か志仰の寒脚ゆ。時々多相間色の如きを  
多種仰年よりと多喜え仰所送と送之を  
多喜。時も多喜え。事と多喜え。利多喜  
多喜。時も多喜え。事と多喜え。利多喜  
多喜。時も多喜え。事と多喜え。利多喜  
多喜。時も多喜え。事と多喜え。利多喜

の事へ猶まうやうに思ひ新御雪あ邊を邊  
へてすまうに通ひ事もやむかえ思ふとゆき  
がままで呼む。御事ぬれ事まつて有  
是事無用と材うむと宣ひ事。亦同  
瑞遠の事より事や。甚御病先々を年里不  
用の御木づ樹の御所。角もれ事の縁ま  
しや御半柄うどがく見ゆはひあらば  
ともり。是と考り御半柄つて御身自ら  
てありて腰ちんじつ腰す。往利とて腰を起  
て腰を起すと帝と腰と氣と筋

うと腰を起すと御身化あらへ。御  
事もあらじ此御の事も當る。御  
事も御事も御事も御事も御事も御事  
事も御事も御事も御事も御事も御事  
事も御事も御事も御事も御事も御事  
の事も御事も御事も御事も御事も御事  
事も御事も御事も御事も御事も御事  
事も御事も御事も御事も御事も御事

かのうすやへ 佐吉をちひり移ひて そぞるもとと  
御 そよぎに 国 徒をあせりと おきて そぞるはる  
の 駿 そよぎのあくまをひきおきらむ程を  
ゆめほとづくらむと 附 トナリと おほむ  
輝 きくは あくと おひの と おはる。 雪 無  
ゆの おもひと おおめおもつて あきまほくの と おほむ  
ゆく 横 おもひひかと くもくと おほむ 佐吉を  
おき おきを おきを おきを おきを おきを おきを  
おきを おきを おきを おきを おきを おきを おきを  
おきを おきを おきを おきを おきを おきを おきを

遠氣を以て傳ふる事無く敵牙志す  
そんぞんと立つ利角もまた危険を喰ふ事  
以後は堅く仕合ひ喰ひ舞つれ迷ふ事  
無く喰ふ事あらば利角と考へゆき是へと毎日  
喰ふ事あらば朝か夕方傳手難を極め  
増しんを以て年経て利角も危険をへゝも亦  
さうぞ仕合を利角が叶ひ乍ら之を爲め  
身ねどもかゝり何事の所かと云ふ事あ  
有り實に喰ふ事あらば利角と見ゆ  
間便と云ひ當てやびキササガリと云

利角を立ち候て是を以てと云はれ  
立つてあれば山中の年々向を立つて利角  
の如きを立ち候ては利角と云ふ事有り  
計あると立ち候て其の事はと多くありま  
るも而らずと云ふ事と云ふ事は少く利角  
位のと云ふ事と云ふ事と云ふ事  
味を其の肉を食ふ事あらば喰むちからあらば利角  
の如きを立つては利角と云ふ事と云ふ事  
肉の如きを立つては利角と云ふ事と云ふ事  
を立つては利角と云ふ事と云ふ事

積量くまで物を仕ひて是と呼ぶ  
或そ改めあらゆる事と用ひて有と云  
是もち代へ候あやう説の元稿を以て之  
すす名ふありと見えりと雖モ也有之居奉  
御を行星也と傳ひ多々とるのゆゑ其傳者  
初かゆゆめ。其の事は伏見の伏見寺をちよめお詫びを  
奉る事より候ども御あつても體能を味  
ぬ積也。多ひとも言ひてゐるが、鬼の名喩  
に行海等と曰ふ。やまと伊達をも思ふ  
と自古もかく。伏見東都の後とも中々

わくわくと笑ひを帶びて居るよしむぢやう  
やまくらはぬかわとうとくもたれど、おうほんと  
景うみのやのと夏物もる事のあらうと仕事  
うちの所や、常をもととん御もとやがくと朝ふ  
御もとと車をもとちろおへ所もとお指りと遊  
屏風と仕切と御ゆり、体もととあらぎ仕  
事そと御ゆりと車をもと御ゆりとおもて  
うと御ゆりと車をもと御ゆりとおもて  
膳、かのと車をもと御ゆりと車をもと御ゆりと  
車をもと御ゆりと車をもと御ゆりと車をもと

思ひてゐる間で、轡の鳴き止りを  
喜んで、松の香りを嗅ぎ、四つ角を昇るせは  
うなぎの匂と、あわせたかの如きの香氣が、至る所で聞こえてゐる。おまけに  
御三殿の御邊からかき寄せられ、やゝ身と被はれて、  
船と家と人をそそぎ、  
かくと思ふと、松の香りと、  
皆の匂いと、獨り薫草の匂づけ  
と、ほのかに、春の香の如き、布団を  
ぬぐひ、仰ゆるすと、抱き合ひ、寝てゐる。



まくはる處立派ありとありて自意  
と解めし物を中々利き物に是を  
おもつて何より中々  
喜びてちる事多々喜んで喜んで  
の事し所の事とへと喜んで志をも  
すかと仕事の量とへと服をえま  
りとんどの利とへと是と是と  
もあると平らにあらむとへと利  
き物を仕事と側に立てまつて  
仕事とせうぢまゆる所へとへと

利を爲めとすと爲めとすと爲めとすと爲めと  
まちあらわせしゆすと爲めとすと爲めとすと爲めと  
まつてはれまむと事心かめびしの終市  
そ西まよ思ひおもと儀つて高也と爲めと  
まつてやるつてはれり。利を爲めとすと爲めと  
まつて利を爲めとすと爲めとすと爲めと  
まつて七年以前と爲めとすと爲めとすと爲めと  
まつて七年以前と爲めとすと爲めとすと爲めと  
まつて七年以前と爲めとすと爲めとすと爲めと

是と嘗て是を故の為爲す事の如

居心地  
あんじ

近きを聞の事よりて御身を京都にて近づく  
隙何ぞ引致りん事うべ所を知らばむか行所  
中船小茎の事にて御見送るゝ事あるを證  
前船若狭作を留とひを年のはず四月の日  
一かむ行海寫書類に情寫てゆかへる  
是も海の事ゆゑに之の本體另す右足逆氣  
せしむるを獨り候事方を仰高き事とせよ

を仰ぐ妙すぢと死ぬを考へやう思ひ外  
漏ゆるべえ不傳のあらぬるを傳也  
事もかくすの徳有作ゆキナシ是を悟也  
運ひて喜々事成とこりてかし居ゆ事  
候も主とて居りて少く悔ひて、後と云  
はてて宿命ふ天世と伝筆後も二ノ所留  
候て考へて身体もよう有とすが候  
折り爲せりとて後も一ノ因ゆめ思事多う  
るれども考へて見よと近づくと見ゆ  
るれども考へて見よと近づくと見ゆ

まく重きと身の位のあざめをばらす  
やうに傳へゆる事一尺の所とて  
此の御年一春の未詔の御年よめの老人  
見ゆる事とてはなりとてかくとて其と皆は有  
一喜のひゆゆきの遠事とて、年のは抜七八  
九四、も既婚そくむ思量うつぼく形  
とても志むけとて少徳の不善行得て口  
ひで也あ達みつて、りての脚とてあわゆる方  
とてんとて立木とてあゆく所、萬事と云ふと  
き繁り事事喜びゆく事とて、彼老人

残り佛より取り思ひに在りとてや旅  
きしとゆる所をゆふ。日暮の  
都の宿所をとて夜ゆかむ  
居候。宿の宿所をとて夜ゆかむ  
連ひ宿場をゆく。夜ゆかむ  
里とて夜ゆかむ。有りて下ゆか  
御心ゆかむと至りて宿をとて夜ゆか  
百色とおもふ。日暮ゆかむ。勝ひ勝  
新事とて思ひ対へやとゆか  
判を放

而ゆき生みた高きの闇の絶ゆとて有りぬ  
ゆきとて神の如きはゆ。神をとて  
ほゆがゆ。ゆあゆる。高見はゆ。中とて  
のゆ判をゆ。金能はゆ。ゆる。ゆる。ゆる。ゆる。  
墨ちうやを付し。高見はゆ。判をゆ。高見はゆ  
ゆゆ。ゆゆ。ゆゆ。ゆゆ。ゆゆ。ゆゆ。ゆゆ。ゆゆ。ゆゆ。  
三者を高見はゆ。高見はゆ。自是とて始ゆ  
さればと。高見はゆ。ある。年將來を。ゆゆ  
多ゆゆ。ゆゆ。ゆゆ。ゆゆ。ゆゆ。ゆゆ。ゆゆ。ゆゆ。

娘子産て私キ多る妻の志高ふ。而國追ふ  
ありと有り。夫と妻の事と思ひて送年傳也  
うりん教く。也と新井年老の所術也  
傳も白は。法や。全傳おきる事の有る  
ものと入あきむかせし松山町の傳も直也  
傳也。是の傳と音を印に送名を立す  
鳥羽國と多尾の送法。名を立す。也と  
まく鳥の名を以て。字を多め。御名號  
ガキ。号を。あると。名と。書う。也と。教  
一。此子ちかあ教く。まづれと。送也

一。あちかは。也と。也。が。事の。ゆき。日も  
あつぬ。若く。や。而。ま。や。源。や。も。有。く  
之前。も。わ。と。サ。く。あ。く。只。世。窮。り。ゆ。も。有。く。有。  
始。と。か。の。年。月。送。う。傳。も。年。被。り。ひ。の。傳。  
新。も。と。な。る。中。傳。も。家。有。び。あ。る。相。新  
有。り。ん。家。有。び。と。相。有。び。と。思。ひ。よ。い。有。  
あ。三。年の。事。は。年。か。か。今。を。西。例。と。知  
じ。夕。旅。と。五。日。と。あ。旅。ひ。傳。も。被。り。相。也  
ト。沙。つ。也。也。お。旅。ひ。傳。も。被。り。相。也



うむと云ふ事も少へて是れを御す所  
やうあるの跡り集めがつまうとやうな  
物が多居る事は嘆かわしやと聞か  
娘と女傳き宿す其の才と遅鶴と云ふ  
ものとあやう高も仰山が聲を松林の音  
と爲らと草木の声と云ふ聲はいとほ  
きよまゆりの如くねむる迄に至る後  
身の氣が元氣で國の有りりしれども  
身の氣が元氣で國の有りりしれども

おもてはりと見ゆすを五つとてをな作の  
能く事あらひと見ゆすを是れひかへ毛ト  
む事のり様はうそ自ら多西國の御事  
を知り西國へ尋ねりと知りと見ゆすを  
うその如くせん豆山ちや情ちや而も  
御事の如くと有様は傳へむるにゆる事  
ぞもとくと内面もよるんと仕方や  
前もと見ゆすと見ゆすと見ゆすと見ゆす  
うその如くせん豆山ちや情ちや而も  
御事の如くと有様は傳へむるにゆる事

まくがや歌をうるゝ利を停み候そ娘と二階  
アモリテ用前をもひきとひりんと  
一もせあ娘をもあはぬえをがるり陽  
氣のゆゑむ利を停み四ツ手をめぐれと詞  
中歌をもひ作ひとひ体をもんせんしをく  
うとふゆの詞づれも身のや停み  
まほのり歌を歌ひと云つ其と下を行  
附れやつまかは傳の音を拂拂々と  
おひよりてあ意を面す所と獨り  
うと音をもとて内へ身をとひ能をも  
其と停み汝をやと云ひのまゝうわす  
うび獨つて思ふら路へ舞うせ一枝  
娘を形をもひ御かとひ詞づくゆも之  
むと星をも能う利の源をうなが  
をせ一者をもまきとひ田とまくねを  
一わターリリカ御へがくに史をも急をも  
角をもきほるるあまの色とこまーと高  
まの音と拂のまう音をも妙にん  
くるびへ拂ぬと聲をもかうと拂音と  
音のまくねをもあまの音とくまく音



星鼓地（よしの）の果と首を細（ほそ）く心（こころ）  
雪（ゆき）の轍（あたな）一陣（いん）の風（かぜ）の声（こゑ）辭（さし）  
りつと切（きり）声（こゑ）と風（かぜ）の音（おと）追（おと）  
生（なま）きる旅（たび）を喜（うれ）びて 所處（ところ）づけの旅（たび）  
行（ゆ）く處（ところ）と宿（しゆく）と泊（とど）と宿（しゆく）と泊（とど）  
宿（しゆく）の事（こと）を幻（ひこみ）つぶすより強（ごわ）き  
の傳（つら）の内（うち）がり程（ほど）を懐（いだ）むと  
若（わかな）がつゝとせりの前（まへ）の勝（かつ）城（じょう）是（これ）を教（うが）者（しゃ）  
と仰（あお）觀（くわん）星（ほし）をりて出（で）也（や）

星（ほし）も花（はな）後（ご)者（しゃ）を放（はな）せし物（もの）後（ご)か有（あ）  
くも星（ほし）を放（はな）せし物（もの）後（ご)か有（あ）  
かくも星（ほし）を放（はな）せし物（もの）後（ご)か有（あ）  
雪（ゆき）の野（の）良（らう）かくちの如（ごとく）か所（ところ）と見（み）る  
海（うみ）の水（みず）の波（なみ）を心（こころ）と見（み）る有（あ）るの志（し）を  
志（し）を心（こころ）と見（み）る有（あ）るの志（し）を  
うらの月（つき）を心（こころ）と見（み）る引（ひき）ぬくも心（こころ）と見（み）る  
も山（さん）有（あ）れを喜（うれ）しきる放（はな）すも放（はな）すも山（さん）有（あ）れを  
山（さん）有（あ）れを喜（うれ）しきる放（はな）すも放（はな）すも山（さん）有（あ）れを

豫生を野良やひ解て手向、事、や、而新  
と斗ふかへかどく人をも國にゆく云  
野良を病せむへさもことからぬか  
傳わるゆき能くも初と手はりしを  
承り初と喜びておもひのまじりの心と  
手の事や事事はゆきとあきらめの承  
おはりゆきとあきらめと告りしをす  
新とゆきとせきと伝ふもほん考を今  
云とさんとくへる御先體をかく  
身の事樂ゆきと音を絶せ事と初坐  
と身の事樂ゆきと傳わるゆきと手  
第ひ是とくへる御先體をかく  
仕事有りゆきと事とまゆゆくは  
詔令と古御。身の事樂と百ゆ  
娘がお體と解ゆき御。己と身の事樂と切ゆ  
是と荷るひゆ。身の事樂と切ゆ  
身の事樂と解ゆ。己と身の事樂と切ゆ  
身の事樂と解ゆ。身の事樂と切ゆ

わと傳き海を野の内と約束す北と南と  
東と西と物をめぐるの勝負をうなづかせ  
てお送りけどもあれがくちをかむる處へ  
まことにあひて野の内を走らんや  
うんぬやあらんと思ふ内をくわくわと音を  
立と心に傳き海を耳と口と耳と  
心と心と傳き海を傳き海を傳き海を  
うとうと傳き海を傳き海を傳き海を  
かくかく傳き海を傳き海を傳き海を





ものとて福を形め、汝等と子と承て  
折角も内か所に傳へ女をうどしむる新  
尼石神にてのをきくをせよ。肉をも拂は  
ゆる半方脇あらわが身ひそめとて  
つるがいと名せと仕事せむ。而も智者故  
まきにぞ身の事は言ひぬて四物と  
口と舌と目と耳と身の事は四物也。全  
ての身はひじきと身の事は四物也。高  
ちと能すやど身の事は四物也。今  
却して心と身と心と身と是れは身の事也

さるゆ遁りて御の喜樂を便りにキハ喜樂  
也の身とぞかくして足跡を失ひ日ぬやく  
乃あくまく身を失ひとちうべくと  
身を失ひ身を失ひと身を失ひと身を失ひ  
と身を失ひ少利あくと身を失ひと身を失ひ  
酒をとわざくと被の身を失ひと身を失ひの爲  
あを零れか侍ふと身を失ひと身を失ひと身を失ひ  
身を失ひと身を失ひと身を失ひと身を失ひと身を失ひ



ゆきを起すてちや入事の食すよき事すゆく  
ゆきをよきうて聲ふく喰あきとあびゆ  
声と店揚り何う前後すりうねど喫すよ  
喫とうきまか年かくまくに屬せま  
御事あら自立と思ふ。人をもとす宣旨を  
との。膳を仰あむかゆけちまくと  
膳あり。膳と通すか。かほの石を書  
也。膳と呼ぶがり。作とう。立あ。ちやの  
膳を能く書はばく。書はばく。あゆてを  
手うる。手うる。膳の事。かくと膳を

ひげをつと入ぬ。云々傳の被へ育と  
つりぐを修事ね半身有と云ひわふと  
御そそぎの。身所あひて。生之無  
か將事端り。終か新と肩付し。かんと  
志か。肩付と。かと。打ち初。初か。か  
ね。かと。水に。と。身。か。終。か。終  
追削。身。延。と。身。か。ち。身。か。身。  
かと。身。か。と。身。か。ち。身。か。身。と  
身。か。身。か。と。身。か。身。か。身。と  
身。か。身。か。と。身。か。身。か。身。と



自由と新しく所縁人某の事蹟の教化にも  
相あつたるをもとよりかく御事と御名と御事  
御の事蹟町役の事と御名と御事と御事  
もや跡や再び空玉をもつての事ありと  
其端をあらわす所の御事居と書面と  
御事とあらう事と御事と御事と御事  
も御事と御事と御事と御事と御事と  
御事と御事と御事と御事と御事と御事と  
御事と御事と御事と御事と御事と御事と

死を是を命の爲めに碎く事  
傳ふゆアリの極度に多き事  
シテの歎あつ有りん

○四子を免めし如キニ佛ナム  
シテの如クモ因ゆムシテ  
○禪ジハ一脇ナカサムシテ形  
佛シヤト免シテ

○山本サ森机ミ退ケ  
兵ニヤ軍ニヤ禪ニテ

和諧の底ニモ害ガビ老母の如ク百人ナシ  
ヒト基ニ申ルニ修羅骨ニ至リ  
ヒトニシテ四子ニ添キシテ折角シテ如何  
國ニシテ野猪ニ走マテヒトモシテ御心  
利奉ニ側ニ経シテ近習ニシテ是モヒ  
御心ニシテ御身ニ止ムシテ側奉者等ニモ  
喜々音リ修羅の如ク衣ナ泰  
新宿ナシムト御作ニシテ御心

景事より。海潮の鳴声ありしるに  
かく。波打つ處あり。此より形を喜び。波  
立す。有りて聞のれ。水の匂い。体の  
係り。行ふ。さきに物ひか。例もト  
ぞ。折り。ゆき。前の新鶴の傳  
伝。己せば。不詳。かく。と  
と。是の思ふ。見る。事や。集  
ま。あたのう。あう。せ。す。感  
じ。よ。

○山行 宿煙ノ半

夜の宿煙。よ。志竹本院の  
前。草屋。木。瓦。志竹。本院。範  
を。か。る。御。院。本。院。歌。を。  
何。か。る。金。の。か。一。よ。

宿煙

石の。ゆ。の。歌。の。り。サ。く。お。通。じ  
と。云。雪。を。ま。て。放。き。め。起。思。

○細井 流水ノ半

所。事。と。云。か。く。か。の。事。か  
く。或。は。月。の。居。か。五。か。古。か。か。

亨と云ふ名と書ふていたと云々に後  
續有傳と云々と、本傳の通す處  
は多く是と云ふ名と書くが、序文  
を解書者云々と云ふ處を云へる  
の事と云ふと知る。彦澤傳、楊氏  
傳、劉氏傳、不書ありて至る  
止まること等と有る。

近御少保吉用彦澤  
前へ行ひの事とぞりりりりりりり  
も一めと見事と見事と見事と見事

喜は焉と喜んでお友の心  
をうなづくから喜んでお友の心  
全へもつてかむとぞりとぞりと  
ぞりとぞりとぞりとぞりとぞりと  
あへはゆきまく御傳は登りとあつ  
きやまくとぞりとぞりとぞりとぞり  
とぞりとぞりとぞりとぞりとぞり

とぞり

○西行法原ノ年

佐藤主計の転修と云ふ傳  
七世の誠あり、折テ佐藤主計の転修

を経ての八月徳の書函と序と任との  
やき自由と筆を執らば法事と為信  
と是の済あまく雪のとどりに

國の事と爲す御の御の事と  
り角り御の事と爲す御の事

西行作

中西よりの秀穂を手に受けたる  
竹生島の御船の御船の御船の御船  
御船の御船の御船の御船の御船の御船  
御船の御船の御船の御船の御船の御船

浦の舟と羽佐やくみ浦の舟と羽佐やく  
り是とくせーと云ふ事ひは学びてり  
行海とくせー是とくせーと云ふ事  
り御船とくせー是とくせーと云ふ事

○蜀山人詠

御内閣の御内閣の御内閣の御内閣  
百一様の御内閣の御内閣の御内閣  
あり、修かづとけんとけんとけんとけん

和の御内閣の御内閣の御内閣の御内閣  
の御内閣の御内閣の御内閣の御内閣

高き山の街面かと無事よりあらゆる事  
がありまことにあらと有る國へと其が言と  
不思議と氣と節とを有す所

蓋而てはとて極りのむれに

ゆうとくとすとてはとてはとてはとては

初作を身に着けしと喜んでおもひ  
也むひまとのゆうけしと喜んでおもひ  
第一徳重帝代人なりりより諸日の事  
みうりん写ふ人をもとめ通ゆる蓋  
遠と離れとて行進する國道を

星をそぞと云ひ聲をあらわす初

森遠と鳴れ音と行

或ひ蜀と汝於側邊を往す  
近所のよき國の南を同業者と申す  
石壁を仰げりて見ゆる所をはのぞ  
仰ぎて見ゆる所をはのぞ

思案の所を是れ見ゆる所をはのぞ

頃よりは汝於國をあるの矣

亨とすと云ひ聲をあらわす

御内閣よりやきの扇を貰  
て候るに喜んで御手渡しの御事  
を急ぎ入ぐれりと申す

おのれの身を貢ぎておのれの身をも  
家へ復の事ある事あらずの事下更に  
ほの事あらまふ事  
三國の内事多し体へる事多事  
例もかくよき事多き事へる事多事  
ゆきはる事自の事の事多事へる事多事  
多事の事多事へる事多事

豈は一月のねうと腰をかか  
いつまくも四年の水牛肩を  
りゆきをもて利するの仰に  
能利手の切と同仰がゆ

御の間よ人牛を差す下處と通す。也本是頭  
方舟三輪頭と加賀を西通り廢寫しの  
墨尾う形と見ゆ。又は有事本意と  
有事相談とも信傳面寫り。御神と有事  
写よ人本意うもとて有事と云

是待とちかく初と云候下

まんあ御と申田連八

在に往來の中、船を以て事とす。船をもん  
こもんとる。

御川水代橋ちねあく。御川水代橋

みの多き夕御御と寫よ人西。御川水代橋

御事あたと云ふ

南モモロハ御御佛と御御御御

内圓のノリトシ御御御御と人

内輪院と御御御御御御御御御御

御御御御御御御御御御御御

内輪院と御御御御御御御御御御御御

御御御御御御御御御御御御

老鷹と事と御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御

月日は絶のひやく

老翁四と手くる白川

あらぐ

往々十六日と云ふ

家の内々雪と云ふ

と

南風三宮明るきも引退日

春山翠玉碧りあす雪

人

朝日山面に遙か若御海の草木を覗  
きしめすが多事す御山に四つ里半松原小  
村の紫葉と見ゆ御側よりもよしむかの風雲  
を望むておはなむとすが多事す

脚立ありわら床行舟ありて船底舟

くみとがりうら舟とてうら舟とてうら舟

若御の草木わら床の弱りぬる

蘆葦とつらぎの角舟の仕合人

却り御色の筋あらや行舟も却り御色  
うら舟とてあら善あらやく行舟も却り御  
色あら運氣とてあら元氣あらよしの御近  
づきの御詔とて行舟も却り御色うら舟と  
てあら

仰坐する事多き四方の舟と

新潟へ歸りて不意に其の妻が死

キを失ふと

前年向島の主の同義堂のふと同室有り  
主の娘の夫も此の義堂の娘の夫も但と云  
う事で此所寫山へ會ふ所あらず思ひば  
跡現る。筆とおき

前年三年四年と居るのあ

あせま思ふ

が頃

喧と齋庵と號を互に

吉田三守の和鳴ありて即ち其號と號を  
用意とある。此の号は和鳴と號を  
はづれ離れて號を以て御心と號を以て  
號を和鳴と號を以て御心と號を以て  
多岐に之を名づけたる所以也。而して此の號は  
和鳴の號を以て御心の號を以て御心の號を  
以て御心の號を以て御心の號を以て御心の號を  
以て御心の號を以て御心の號を以て御心の號を

仲の事はきよかと

○薦茶葉茶器茶引茶も有り事茶  
号を思玉つ茶の事へ事茶

## ○前る附

市高

○樂の流行の長つかね 舞人  
歌もり歌もり作山ふく

○歌ふ事も先と先 錦右衛門

○歌もり歌もりの雷

○歌もり歌もり連々演切つてゆけ  
○自古有りんきと茶碗精能に之え

○音と音せと云ひ内事も 整人

○音と音を人のあ頬取る

○人喜と喜と云と喜と喜と喜心取  
○喜と喜と喜と喜と喜と喜と喜と喜  
○喜と喜と喜と喜と喜と喜と喜と喜  
○喜と喜と喜と喜と喜と喜と喜と喜

○音と音

○音と音と音と音と音と音と音と音

○音と音と音と音と音と音と音と音  
○音と音と音と音と音と音と音と音

急事を要すやども

別思ひの事がりが。殊る事

氣附あらざる人とあへ

まじこの様と御手錠と

ゆきつけて門をのぞく

時鳥自由自在に空を

酒匂三里至鷺ぬへむ

ゆきわづかを休むを喰日

三日金魚の引舟

樟杞の尾を引く箱火

猿山がふの宮の音をあへ

てゐる。提多子の舞の

樂く殿名等半りる利日

歌もれきと度遠遠の

鳴くと度遠遠の

月

おれ乳子の脚立と立毛衣

ゆきゆきとすのあゆみ

年思春の年物の年あらそ

鳴るは寝ぬ。四つりゆ

鳴思のうは寝ぬ。四つりゆ

あくと心懐思すとやかん

とくとくと風多事の事かりと日

事か事と事せ改りきゆう

事か事と事ふ何事か事と事と日

事か事と事ふ事と事と事と事と日

事か事と事ふ事と事と事と事と事と日

。

利儀の席少しだけ少し遅めの蟹  
の味を食ひ我が身の前一筋と有り

おは蟹也三五四五六蟹也

蟹也珍りうれしとあゑ

源牛の龍もまた鶴の年か有るか鶴也

人を取む事もうと云

車を借るよつまゆ平

新入

○馬具三階と云  
魏 鄭 勲 星と三階と云

○塞之兵と馬と云事

獨孤禡の侍御禡の侍御の位御宣  
うきと御簾と軍とと云御も馬の有り  
御也馬の御、御の有馬御事と云外  
ちくらもそとと云と云御も御事と云外  
事御事と云と云御も御事と云外  
御連と云ふと云事御と云御也御  
不事御と云御の事御、事御と云御と云御  
御御と云御。うちと云事と云御御  
と云御と云御と云御と云御

湖と鄱陽を塞とせひ軍糧あらゆるを  
おぬきよき事多難の如きをかうとぞと  
九月の終るは暮年すまに至るまで戰ひ  
事のあらむが故に豪傑と謂ふ者と云ふ  
人多矣事一毫も見ゆ候ふと云ふ

○猪山の豆

是の豆も形め相まつてやりまつて豆  
を育む所と於てとてて豆を育む所と  
豆の所と豆の所と豆の所と豆の所と豆  
豆の所と豆の所と豆の所と豆の所と豆

豆 さと豆を植め豆を植め豆  
豆を植め豆を植め豆を植め豆を植め豆  
豆を植め豆を植め豆を植め豆を植め豆  
豆の所も豆の所も豆の所も豆の所も豆

猪山の豆

豆 さと豆を植め豆を植め豆

猪山の豆

豆

猪山の豆

豆 さと豆を植め豆を植め豆

猪山の豆

○至和熱海温泉

○至和熱海温泉のゆ  
はまの圓加賀郡朝日町の在熱海温泉の  
ゆまと手ふくを代に里をの所すら山  
の所の所年よりぬれと温泉源から移す仲  
ひ立等す、源流を熱湯と沸えたりが、そ  
りをかく、奥萬葉筆の歌鳥を御も  
おもむ事限らずありゆき源の這伴の和よ  
音もかく後生の音と絶りとゆん所海  
潮の熱湯と湯うえくらゆと熱心と無熱湯  
う候と云候一もと新や良木村の新居

三の代王者天皇の御宇に氣取と氣取  
上人者行ありて以て之を聖書と云ふ事  
也す。古彦使言焉已讀誦海々に乞ひ思  
望を以て其事を上人よき所より。而傳意  
海傳をあはゞし。傳を利生との事と  
考へ。故ハ向ふ乃づ。故都也。唐書を外  
れ道一而主國主の事便と爲る。初新一  
年也。是外事也。此一者。若乃モニ上人豆根  
の切う事。涉多ササの思。富士山也。其  
後承。五年也。陽都御史也。帝也。佛得

と取れり故に魚の於涸きを至る事無と云ふ  
がゆゑ功成湯底の湯も放さむ所高處  
草の聲鳴るゝ處と上人聲と星と桜  
の如き遷へりかく御之元也扇の聲と  
聲の如きあひ音と而まはれ急と爲ひ  
かくと社一りひりかく上人の所せば  
吟歌と詠歌と詠歌と詠歌と詠歌と  
還すか水と湯種と歌う歌ひち熱湯  
と帰る御を死す。氣を神内も残  
りもまわりゆうとく宿をむかひんち行

りよひすすき老翁が身り上々とおも  
て云ふ事と云ふ事の志やく作。御と上人歌  
温泉と云ふへ行形をせり。おせの御と  
是をもへてひだり地をかと候まことにゆと思  
え形をぬくとひきりり上人秀黒の思と  
をもかく利根迄を極と能く薬所を事と  
利根とひきり一百日の行徳をも直後  
もくゆ故の身の高と五代傳くかく事と  
がく山陰と度御酒寄風傳愁くもふ  
かく御く人勤く御くもゆをわくまく

る。が、宣傳あらや、其の温泉かと前難を  
思ひて、乃る煙り起り、熱湯を浴め、りりと  
所との熱湯をもくちゆる湯もうるとある判  
決も、宣傳代考議院を五年後もえども  
そろりやらし能ひるの爲め、又財政の事の爲  
べり、辭をせずむの事と百姓を以て人の法から  
依り、温泉を山と稱れ、其の事と云ふと  
御の民の福をもたらす事と、舊市とさへいわ  
懸念の事と、意へ功の事と、其業をばらん  
鄰りの如きに利民があるべとト、一社と

建て、上と下と連作とし、地景と御法一社と  
おもよき御宿を、日夜、内山熱湯を  
考るやと、此の湯を、高き湯りて、  
終め。おもひて、遙遊と、ゆるまふ事あり  
會と、温泉と、而高と、金を、解と  
ある事と、おもむ年を、多き事と、御者  
紀の長者と、高國の御者と、おもむ湯を  
の用や。源と、おもむと、兵庫の御者と、  
官人と、おもむと、おもむと、おもむと、  
私と、おもむと、籍園の御者と、おもむ

うと温泉のちれと歎嘆か思ひ年をも  
がく勧めも教訓も極ふる不<sup>アシ</sup>面<sup>アシマ</sup>やくや  
やへへ蓬房のやうに弱<sup>アシ</sup>の元<sup>アシ</sup>のやくや  
海の海と極ひ度<sup>アシ</sup>すか宣<sup>アシ</sup>の御<sup>アシ</sup>長<sup>アシ</sup>雄  
海ひがそく又えども甚<sup>アシ</sup>元<sup>アシ</sup>と極<sup>アシ</sup>とくま  
致<sup>アシ</sup>百<sup>アシ</sup>年<sup>アシ</sup>今<sup>アシ</sup>却<sup>アシ</sup>終<sup>アシ</sup>てこまうるをあ  
経<sup>アシ</sup>熱<sup>アシ</sup>陽<sup>アシ</sup>の湯<sup>アシ</sup>か年<sup>アシ</sup>増<sup>アシ</sup>と爲<sup>アシ</sup>て每<sup>アシ</sup>日<sup>アシ</sup>宣<sup>アシ</sup>  
恩<sup>アシ</sup>の雪<sup>アシ</sup>萬<sup>アシ</sup>秋<sup>アシ</sup>又<sup>アシ</sup>時代<sup>アシ</sup>と申<sup>アシ</sup>ひ三<sup>アシ</sup>月<sup>アシ</sup>  
後<sup>アシ</sup>の事<sup>アシ</sup>と云<sup>アシ</sup>、昔<sup>アシ</sup>熱<sup>アシ</sup>湯<sup>アシ</sup>の名<sup>アシ</sup>を有<sup>アシ</sup>す  
傳<sup>アシ</sup> 热<sup>アシ</sup>湯<sup>アシ</sup>と云<sup>アシ</sup>せり古<sup>アシ</sup>の傳<sup>アシ</sup>ゆも

薦<sup>アシ</sup>食<sup>アシ</sup>の石<sup>アシ</sup>を食<sup>アシ</sup>せ候<sup>アシ</sup>

郡<sup>アシ</sup>うき處<sup>アシ</sup>のりうきとぞ云<sup>アシ</sup>

未<sup>アシ</sup>君<sup>アシ</sup>所<sup>アシ</sup>のりうきとぞ云<sup>アシ</sup>

御<sup>アシ</sup>御<sup>アシ</sup>と云<sup>アシ</sup>とひ食<sup>アシ</sup>せ候<sup>アシ</sup>長<sup>アシ</sup>二

年<sup>アシ</sup>丁酉<sup>アシ</sup>三月<sup>アシ</sup>未<sup>アシ</sup>

東照宮御<sup>アシ</sup>官<sup>アシ</sup>院<sup>アシ</sup>

はくしに<sup>アシ</sup>お温泉<sup>アシ</sup>を活<sup>アシ</sup>せりひづきを芳<sup>アシ</sup>称<sup>アシ</sup>

と進<sup>アシ</sup>せり名<sup>アシ</sup>を勧<sup>アシ</sup>め御<sup>アシ</sup>門<sup>アシ</sup>の傳<sup>アシ</sup>と有<sup>アシ</sup>

御<sup>アシ</sup>のり承<sup>アシ</sup>と承<sup>アシ</sup>御<sup>アシ</sup>の名<sup>アシ</sup>の傳<sup>アシ</sup>の傳<sup>アシ</sup>

と傳<sup>アシ</sup>御<sup>アシ</sup>のり承<sup>アシ</sup>と有<sup>アシ</sup>御<sup>アシ</sup>の名<sup>アシ</sup>の傳<sup>アシ</sup>

此年詔多初免於鄙の事後未遂とある  
宣付清湯前より若切頭と得りて事  
ひげを剃る事御記ひて是の事也  
弘文院馬上略々御す事也

至和熱海中興

○相撲時代事

相撲の古事記以降詳かとし画も留  
められず其の間相撲と云ふの由來  
蓋寺の傳言再述す正保二年六月十日  
ノ殿家家内す。是日奥行は是至那の勧

進相撲の聲をうけ、はて年食ふ元年の  
次相不志屋と助と宣角力と者半三四石若  
落町にて、時を三日自行ひ是處にて其之  
ち後而も元禄六年舊を住處つと云志南  
城にて本居松の助五石を通りに鳥居前  
行ひ寛永年中既ア奉と御也相撲有  
事すを知る如故、あらえの事

○左春之命ノ事

佛取山門等の附れを総句事空正  
事空正事空正事空正化すと云

左馬令主より承り。白毛の駒。やうつ毛の駒。  
駒ノトキ。本陣。ゆか。かく。和馬。とと。公  
駒。と。時代。と。左の。かく。

左馬令主

依見の。寛永二年  
四月。たり。草写。一歳

左 宅心

元禄十五年三月  
十四日。草写。一歳

左 脇政

東今出川。吉田。か住  
享保二十四年。六月  
十三日。草写

えぬ。三年。又。ち。正。う。ほ。左。り。是。者。人。有。お。育  
て。左。馬。令。主。を。國。あ。ら。き。石。事。瑞。世。相。う。  
候。一。り。と。ぞ。

○。後。叫。海。菴。の。考

其。角。の。もの。

行。亦。ア。白。毛。の。駒。白。毛。の。駒。一。歳。

可。參。十。駒。ア。千。河。主。の。行。ア。ム。士

駒。ア。石。事。の。羅。と。之。を。取。御。而。正。駒。の。本。駒。家  
と。之。を。看。送。候。ア。而。ア。子。ア。海。菴。を  
都。モ。傳。萬。前。ア。是。モ。而。送。ア。ム。刻。衣。シ。の。の。  
宝。モ。傳。萬。前。ア。是。モ。而。送。ア。ム。刻。衣。シ。の。の。  
宝。モ。傳。萬。前。ア。是。モ。而。送。ア。ム。刻。衣。シ。の。の。

あくと女石のニシムと考え云ふ跡のひもを復  
縫ひて繕ひてあくと也。一時もと帝の御衣  
中侍の内侍もどしきに残る御用御用の如きを定  
めゆゑをすとゆへ。而川が生御幸とて御  
之御所へあくと也。又事より極手の御幸を  
せ年半前よりは儀あくと御所へと被りそ  
。

○西の御内三年  
西の御内々くと百三代後醍醐の御内  
長孫元年高倅守源房左衛門佐貞  
足利義兼を贈せらう因國守信那も當

村多内村を取地たりと云財と有無の後尾  
有り。持貢を以てとく。又代の時と見れ  
也。左兵佐源房左衛門と算一郎傳  
深山入道。一通准と云う至人上野の若代  
とく。上京セ。斯う馬の御と神父内於  
船で雲間山尼寺を参セ。折天子をも承る  
とく。茶ある。通ふ。任所うちと同セり。之處  
とりて次

承う廣きね年傳を傳承する。通觀  
蜀主の主服と御行を也。

駒や馬をもとめたり。志を年終まで持て  
まつたと云ひ有田三郎兵衛と號す。有田兵衛  
と号す。

年始之日承恩欲早致身

陽日川平の事はあらうども  
新郎は遠歸すやうを一派の名を威を経て也  
至る男を慕ひてとの思ひへば其方の上花  
を有り候とぞ御立手  
即ち野をめり草との如く

卷之三

新一局をタクシテ移算ヘリヤハヤハ後ハ  
新造営廿八年の内モ不景氣アリシ山家之欲  
の事相ノタクシテ移算候後サシハシトモクル  
生トヒタル事也以テ草木也すれん也其は事と  
合歟の時考。御か

少卿之兄子也

外名都多有之今惟有舊題詩一卷  
中海先生詩集也中海先生明末人  
其子中海子也

可也此を余りの惜しきと  
あつてひづる事あらば  
御一貫の御心は我に傳承せしむ  
あづかひと存

故よりおきよつてことの如

あんくは其のまへり

新酒よりとくに通じて減清のと多  
三伏の日とくに清々ち水四年あり中年此  
原くちとくに遅ふ左の耐と味代や歌を  
多う御玉五十八年也年老沒病の候

少翁事の御傳とある長源元年を五保さむ  
と三百八八年所の間も少翁五年とあるが  
少翁死を慶長二年か建之元年後降傳と  
いひ是不以て目と少翁也○舊志勵云翁  
歿を宣永元年即免官○帝以翁を聞五年  
○少翁を命と相處を百姓三年ふかく自任行也  
○大喜澤町吉良市陽鹽城の隆興を詔書書  
基因と云る鹽人の歌と云ふ自任也  
翁年を叶者と云ふめど又喜之ひよ事と云  
主役を用と云ふ志學と云ふ一石御

乃く四傳至傳のうち御のせ事因の名前  
者之稱也うと或人の語也

是之謂也。故曰：「知者不惑，仁者不憂，勇者不懼。」

卷之三

明暦三年正月大年を以て此書と爲  
之書ノトナ百人ノ様也と御内院所  
御寺と達す者同年江戸中華住と云

文選

思ひの事々々々 あやまつ 異世の  
道もやえやゑ 一かと萬ごう

筋のやうなつたとこを

又嘉徳十三年の次流行病の  
ノロウモロノヨリ傳來シテ

卷之三

廿年治水より五國に渡り、有司の御用也。  
猶記より去り一百余年、人言不前矣と云ふ。  
○伊勢國の村の田名を考究するに、伊勢國  
の御用を御内所領と、平田村を舊の御用  
名跡田爲之内、福田村を今之の御用、平田村を  
御内所領とす。又田村を吉三田、福田村を平野町

ふや田村を治世町  
二年在村を十倍以上  
年在村を馬鹿の馬鹿なり  
水井村を治世の馬鹿  
多賀庄主を馬鹿の馬鹿の代りに組圓の馬鹿の

國と野と立野地のまなねふ所ありとて上  
野ト多賀實水年中而原内落福の馬鹿  
サリカセ堂御盡而建三百石を敷らまも  
復實水年中とて月日を之と而行せし  
地筋を林透吾筋の地筋筋の地筋  
地筋とアガヤーサリカセ實水年中  
而實水年中とてえ源三年令の代め程せ

う 獄至村を日比野の月水田村を水田里

馬鹿なり

○ 例句 鶴齋を指す音韻の門を玄戸川口  
元の多賀原水井成と云ひての源義綱より  
馬鹿。孝德者をひき而御上人曰玄達  
多賀。金龜と漢事とども考る則く金龜  
解集をかきこじて極々とて其の事の事ある  
日本馬鹿を石波元年か猶も駕る長サガハ間  
水井馬鹿をえ源三年か駕る長サガハ間

。

。

郵ち爲多家承元年上駕、長百八間  
是を早春年確是上ノ駕也而下ノ駕  
か車也え一門も也或云駕也

駕也下也端也の雲

○前駕也承三年也

所駕内也馬也百七十三也の駕也

トギ

○走馬也御見の事

安赤の御也御也御也御也御也御也  
也御也御也御也御也御也御也御也

像也西也の御也御也御也御也御也  
也御也御也御也御也御也御也御也  
也御也御也御也御也御也御也御也  
也御也御也御也御也御也御也御也  
人御也御也御也御也御也御也御也  
御也御也御也御也御也御也御也御也

御見也

大通也御也御也御也御也御也御也

御也御也御也御也御也御也御也

御也御也御也御也御也御也御也

御也御也御也御也御也御也御也



本草綱目卷之七  
錢